

オープンエデュケーションのご案内

本学では、youtube「大正大学」において、本学の紹介のほか、教育コンテンツの公開等を実施しています。下記 URL をご参照ください。

https://www.youtube.com/channel/UCp6-9sw_nLmm_4GRmWHpucg/videos

また、教育コンテンツについて次のとおり紹介いたします。

【授業科目】：第 I 類科目（共通教育科目）「問いの探究 3（グローバル・イシュー）」

【担当教員】：星野 壮、鶴川 晃、大場 あや、問芝 志保、問芝 志保、小林 惇道

【講義の内容・目的】：

近年、国家の枠を超えた問題として環境や資源問題、貧国や格差問題、人権問題、戦争や紛争の長期化、そして難民問題などが起こっている。これらの社会的課題に対して個人として地域、国家がどんな役割を担い、どんな可能性を提供できるのか、まずは現状を正しく理解する力、課題を整理する力、複雑な課題に対してあきらめず解決策を見出そうとする力が求められる。本授業では地球規模で起こっている社会的課題を3つの視点から理解を深め、知識集約型社会を見据えて複雑で多様な社会の課題に応えることが出来る資質の獲得を目指す。

第1回 偏見や差別はどうして起こるのか（鶴川 晃）

まず日常生活で起こっているいくつかの事例から自身の偏見について認識し、その上で偏見とはなにか、偏見はなぜ起こるのかを理論的に学び、偏見を低減させるための理論と実践について個人ワークをとして理解を深めます。

第2回 ナショナリズムとは何か①（問芝 志保）

「ナショナリズム」・「ネーション」・「国民国家」という、本講義の基礎となる3つのことばを詳しく説明します。それとともに、いくつかのニュース記事やトピックを取り上げながら、2010年代以降、世界各地で「ナショナリズムの高まり」が注目されるようになっていることを確認します。

第3回 ナショナリズムとは何か②—ナショナリズムの思想・運動—（問芝 志保）

E.ゲルナーの『民族とナショナリズム』を取り上げ、政治的思想や運動としてのナショナリズムについて解説し、民族の統一運動や独立運動、異民族の排斥運動、同化政策、自国優先主義などが生じてくるプロセスを考察します。

第4回 ナショナリズムとは何か③—想像の共同体— (問芝 志保)

B. アンダーソン『想像の共同体』を取り上げ、ヨーロッパ・南北アメリカ・インドネシアなどの各事例について解説したうえで、私たちが見ず知らずの人を「同じ国の国民」と考えて連帯意識を持ったり、国のために命を懸けたりするメカニズムを考察します。

第5回 ナショナリズムとは何か④—文化ナショナリズム、排外主義— (問芝 志保)

「武士道」論や「日本の文化ってスゴイ！」番組を例として、実は私たちの身近にある「文化ナショナリズム」を、E.ホブズボウムらの『創られた伝統』を参照しながら解説します。また、他民族に対する排外主義の問題についても考えていきます。

第6回 ナショナリズムと言語①—「ことば」とアイデンティティ— (大場 あや)

私たちが普段使っている「国語」の成立について、ナショナリズムとの関係から学びます。言語とナショナリズムが結びつくの？と思うかもしれませんが、当時の国家の理想や世界状況が色濃く反映され、多くの人々を巻き込んで議論されてきました。その過程を見ていきます。

第7回 ナショナリズムと言語②—インド亜大陸の事例— (大場 あや)

“超”多言語・多文字社会であるインド亜大陸（インド、パキスタン、バングラデシュ）を事例に、言語と文字が宗教や民族と結びついている状況を確認します。そしてそれがイギリスの統治下において「分化」し、国家の分裂とも繋がっていくメカニズムを学びます。

第8回 ナショナリズムと言語③—バルカン半島の事例— (大場 あや)

「ヨーロッパの火薬庫」として知られるバルカン半島を事例に、オスマン帝国支配、数々の戦争、ヨーロッパ列強の介入、旧ユーゴスラヴィア建国などの流れを踏まえつつ、国民国家の独立と政治状況、宗教、民族の違いが「言語」に与えた影響について学びます。

第9回 ナショナリズムと言語④—中国・台湾の事例— (大場 あや)

中国・台湾の近現代史、とくに日本の植民地支配と同化政策の影響を踏まえ、台湾における言語政策・文字改革について政治に注目しながら学びます。最後に、4つの事例を総括し、言語・文字と国家、アイデンティティの関係を考えます。日本の状況と比較してみましょう。

第10回 ナショナリズムと慰霊①—国民国家と戦没者— (小林 惇道)

戦争形態の変遷、国民戦争が生まれたきっかけ、近代戦争の特徴を踏まえた上で、国民国家にとって戦没者を慰霊することにはどのような意味があるかを学びます。慰霊という切り口からナショナリズムを考えるにあたっての概論的なお話をします。

第11回 ナショナリズムと慰霊②—イギリスの事例— (小林 惇道)

イギリスの事例を紹介しながら、第一次世界大戦のヨーロッパにおけるインパクトの大きさ、戦没者の遺骨がどのように取り扱われたかを学びます。そして、国民国家にとっての無名戦士の墓・碑と、そこでの慰霊行為の意味合いを考察します。

第12回 ナショナリズムと慰霊③—日本の事例— (小林 惇道)

多くの学生にとって身近でイメージが湧きやすい日本の事例を通して、近代日本がどのような国家的祭祀を行ってきたかを学びます。さらに、地域社会と各家での祭祀にも着目し、日本における戦没者慰霊とナショナリズムの関係について検討します。

第13回 ナショナリズムと慰霊④—アメリカの事例— (小林 惇道)

アメリカ合衆国の事例を通して、アメリカにとっての南北戦争の位置づけと、その慰霊行為が国民統合に果たした役割を学びます。結びに、国民国家にとっての慰霊とはいかなるものであるか、各回で取り上げる事例をもとに総括します。

第14回 本講義のまとめ、レポート執筆 (星野 壮)

前半で学んだ「ナショナリズムとは何か」という総論的な議論を、「言葉とナショナリズム」「ナショナリズムと慰霊」という2つの大きなテーマにつなげて「理論と事例を結びつけて学ぶ」ことをしてきました。それらの講義内容を振り返りながら、レポートの執筆を課して、評価につなげます。

【教員より】:

今後のウィズコロナ、アフターコロナの時代に、ふたたび多文化化への道を歩むであろう日本社会を考えたときに、文字通り世界の問題のように思える「グローバル・イシュー」は、身近でパーソナルな世界にもかかわっているのです。本授業の内容が、自然とこれからの皆さんの日常へとつながり、そしてそのとき直面するであろう課題に取り組む力の源になることを、切に願います。

以上